



「下村満子の生き方塾」ニュース Vol.20 2018.06 —2017年9月勉強会特集—



フェイクニュースに気をつけよう



応援団講義をする田原さん（左）と下村塾長

「下村満子の生き方塾」は9月16日、東京・四谷の「スペース天夢」を会場に、9月勉強会を開きました。安斎隆子さんが司会し、長島和美さんが坐禅の点鐘を行いました。塾生五訓は今回からパワーポイントで投影し、諸富英輔さんの音頭で唱和しました。稲盛和夫盛和塾長の著作「生き方」を菅野寿男さんのリードで輪読。午後からは「フェイクニュースの恐ろしさ」と題した下村塾長の講話に続いて、応援団の田原総一郎さんが「時代を読む」とのタイトルで日本の政治情勢や東アジアに焦点を当てた世界のなどについて、分かりやすく解説しました。

(文責・皆川猛)

「生き方」輪読

● 要はシンプルに考えること

この日は「生き方」第2章「原理原則から考える」の11節「複雑な問題も解きほぐせばクリアに見える」、12節の「国際問題、国家間の摩擦も単純に発想してみる」、13節の「外国との交渉は常識より『リーズナブル』」を読み進め、意見を交わしました。

11節「複雑な問題も、解きほぐせばクリアに見える」は「あつまる」の松井一真、黒石涼、諸泉佳那子さんらが朗読しました。

菅野さんが「自分も考え過ぎる傾向にあり、物事を難しくするくらいがあります。稲盛さんが言うように、原点に帰ると簡単に解決できることを経験しています」と、提起



長島さんの点鐘で始まった坐禅



諸富さんの音頭で「塾生五訓」を唱和

し、これを受けて塾生は次のように感想を述べました。



感想を披露する
植松さん

<植松里菜>

中途採用者の面接に立ち会いましたが、人物を見極めることは本当に難しいと思います。いろいろな人を見の中で、判断基準はその人の性格がいいのか、という点に絞りました。要はシンプルに考えるということです。

<保谷恵子>

会社の方針を示すには、会社の経営理念が必要です。しっかりした原点から、高みを目指したいです。

<朝倉祐子> 稲盛さんは社長だから、従業員は皆、稲盛さんの意見を聞いたのでしょうか。ワンマン社長だからできた、と言えるのでしょうか、いくらワンマンでも間違っていれば、上辺だけの納得になります。稲盛さんの意見は公明正大だったからみんな承服したのです。私自身は高い視点から見る事ができないし、人の意見を素直に聞くこともできません。だからこの塾で学んでいるのです。

<下村塾長>

高い次元での価値判断とは、全体を俯瞰しての価値判断です。全体を見渡せれば、どこが隘路になっているかが分かります。原点はシンプルに、という意味は、難しい理屈を付ければつけるほど、真実から遠くなる。迷った時は「人間として正しいかどうか」にかかってくる。不祥事を起こした企業でコンプライアンス委員をやっていましたが、コンプライアンス順守ということは、違法しないということで、それは、それ以下になれば、刑務所行き、ということ。だから合格点ギリギリの50点でしかありません。しかし、

● 政治だけが国境があり、争いの素

<下村塾長>

従軍慰安婦問題を解決するアジア女性基金の活動を、15年やってきました。総理大臣のお詫びの手紙と500万円を持参し、慰安婦だったおばあちゃんたちと面談してきました。この活動は、形式上は国としての賠償ではありません。



指定されたページを読む塾生

トップが120点を目指せば、社員は誰でも50点に到達できます。トップが50点しか目指さなければ、社員の中には必ず落第、つまり法違反するかもしれません。トップが挙げた目標は、下に降りていけば、目減りするのですから。とにかくトップは最高を目指し範を垂れる必要があります。

12節「国際問題、国家間の摩擦も単純に発想してみる」は、千田利雄さんらが朗読し、塾生が感想を発表しました(敬称略)。

<鉢村 健>

稲盛さんらしい大きな気持ちでないとい世界はまともならないという指摘です。しかし、EUの単一通貨ユーロ導入は人間の本质と離れているため、矛盾を抱えていると思います。お金に対する国家間の意識や感覚は大きく違いますから、高い理想を徹底しないといけないと思います。

<坂本祐一>

国はなくなっても、個々の生き方は変わらないし、それぞれの価値観もまた違います。人間があって国があるわけですから、まず、人間としてどう生きるかを考えたい。自分にとって「生き方塾」はその機会であり、場です。

<橋本光雄>

今日初参加しました。ネパールからやって来た人たちのグループに入って半年ほど経ちましたが、彼らの仕事への関わりは、日本人とは違います。どうすればスムーズに行くのか考えています。彼らはこちらが入っていかないと、心を開いてくれないのです。異文化をどう乗り越えていくのが、私の課題です。



この日が初参加の
橋本さん

せんでした。それがトラブルを生み出しました。国という存在が物事を複雑にしている例の一つです。

情報、モノ、カネ、人はボーダーレスの時代ですが、依然として政治だけは国境という壁が立ちはだかり、それが紛争の素になっている一因です。



論読会をリードする菅野さん（左）と下村塾長

第2次大戦終了直後の1947年だったと思います。20世紀を代表する科学者のアインシュタインと、日本人初のノーベル賞受賞者の湯川秀樹博士ら世界の著名科学者は、世界連邦構想を打ち出しました。アインシュタインは、自分の発明が元で作られた原爆がトラウマとなっていました。国境がなくなり、一つの国になれば、人類同士の戦いはなくなると主張したのです。

短期的には世界連邦は難しいでしょうが、例えば実現まで500年かかったとしても、38億年の生命の歴史から見れば、「屁」みたいなものです。EUも揺れています、あれは一つの実験だと思えばいいのです。

どうして今、世界各地でテロが起きているのか。その根底にあるのは、極端な貧富の差があるからです。初めに国家があったわけではありません。朝日にいた時、私は「アメリカ人のソ連観」裏返し「ソ連人のアメリカ観」を取材して書きましたが、「ソ連人のアメリカ観」執筆のために、人類初の宇宙飛行士になったガガーリンを取材した時です。彼は「宇宙から地球を見ると、地球は空気というごく薄いベールをまとっており、とても美しい。国境などどこにもない。地球はour house(私たち人類の家だ)」と語り、米ソが冷戦間の真ただ中にもかかわらず、「戦争などやっている場合ではない。人類のゆりかごである地球を、人類が一丸となって大切に、守らなければならない」と予想もしない語りがありました。

ガガーリンの言葉ではありませんが、強欲を続けている限り、人類は滅亡する危機から逃れられません。昨今の地球の異常気象は強欲の結果です。

日本も400年前ぐらい前までは、群雄割拠の戦国時代でしたが、今は単一国家になっています。それと同じように、世界だって統一できるはずなのです。

坂本さんの意見ですが、他人がいて自分がいるのですから、自分の生き方だけを追求するのはよくないと思います。今日の自分が存在しているのは、親をはじめ、みんなのお蔭と考えてほしい。

<中島好美>

世界に目を転じれば、国家行政は目的意識を持って動いているから、それぞれの主張は簡単には相容れられません。その点、仮想通貨は世界経済を一本化する一つの手段です。仮想通貨が広く流通すれば、経済を巡る争いはなくなるのではと考えています。



熱を帯びて進行する論読会

<下村塾長>

今の世界は、政治だけが国境があり、一国単位で動いています。これが様々な争いの原因になっています。自国の利益ばかりを「国益」と称して動いているから摩擦が起きるのです。ITを筆頭に、情報も経済活動も、技術も、文化も世界は一つになっています。強い意思と理念を持ったリーダーが出てくれば、世界はきっと統一できますから、人々の間から「世界は一つ」と盛り上げていく必要があります。

13節の「外国との交渉は、常識より『リーズナブル』」は空閑陽一郎さん、大野一彦さんが朗読し、塾生から次のような感想がありました。

<前田香穂里>

外国人を相手に仕事を経験したことがあります。相手は一体何を考えているのか、その発想の基を形作っているのは何かを考えながら交渉しないと、うまくいかないことを実感しました。



自分の体験を基に感想を述べる前田さん

<佐藤 恵> (ヨークベニマル)

中国人が働いている職場があるのですが、思い込みのせいで、つい彼らを偏見をもって見てしまいます。しかし、稲盛さんが言う「人間として何が正しいのか」というベースで自分を振り返ると、自分は全くなっていないと感じています。中国人も日本人も根本は同じ、という捉え方で彼らと付き合っていきたいと思います。

<長島和美>

会社にもいろいろな人がいます。今の自分は部下を使う一方では、上司から使われる中途半端な地位にいます。両方からの意見に板挟みになることも少なくなく、それが悩みになっています。

<佐藤歌子>

この節はいろんなことを考えさせられる節です。ブラジルに渡りたいとこたちは、原発事故を理由に不条理な差別を受けたそうです。異文化の人に対する偏見をなくすには、人間

は平等だという前提で交流することが第一だと思います。

<菅野寿男>

私はリーズナブルの意味を誤解していました。外国と日

本とでは宗教も違うし考え方も違いますから、価値判断の基準も違います。とにかく偏見をなくして交流することが相互理解の基本だと感じています。

● 日本こそが異質な国

<下村塾長>

留学生時代を含めてアメリカで7年間生活し、特派員として世界各国を回って取材をしてきました。短時間で取材相手の本音を引き出すことが仕事でした。その時つくづく感じたことは、日本こそがユニークで異質な国だということです。単一民族が島国で同じような価値観、考え方で暮らしているわけですから。海外で生活すると多様な人と付き合うので疲れますが、日本だけにいると、逆に窒息する息苦しい感覚に襲われます。

数多くの国際会議取材してきましたが、そこで聞く日本人の発言には失望します。ただ書かれた文書を読むだけ。一方外国人はノーペーパーで自説を得々と訴えるから、日本人は無視されがちです。自説を堂々と論理的に主張すれば、それが自分たちの主張とは違っていても、彼らは異なる意見であっても尊重してくれるのです。日本社会はツートン言えばカーと通じる国だから、論理的な説明、議論は要らないわけです。だから外国人たちは、日本人は何を考えているのか分からない、と言うのです。

移民の国で異文化の坩堝（るつぼ）であるアメリカ社会は、自分の意見を主張しなければ認められない社会です。謙虚であっては、やっていけない社会なのです。

私がロックフェラーさんに、取材できたのは、私が欧米とは違う価値観に基づく意見を主張し、それを彼が面白がったからです。日本では、共通の土俵、常識で話が通じるから、くどくど説明しません。ところが多民族の国では、共通の価値観がないから、自己主張しなければ無視されてしまうので、フラスレーションが高まってしまうのです。

つまり、日本社会は世界の中では異質な国なのです。挨拶する時、日本人は、「今日はいいい天気ですね」、など、どうでもいい話から入りますが、多くの外国では、いきなり、なぜ今日はここに来たのかといった本論から話に入ります。外国人は、日本人は前置きが長いから、日本人の話の前半は眠っていてもいい However（ところで）、（しかしながら）からが本論だから、そう言ったら目を覚ませと揶揄されています。

「リーズナブル」という言葉ですが、「妥当」、「納得できる」と訳するのがいいと思います。稲盛さんが言うように、人間として正しいのかどうかという判断基準に則って、きちんと論理立てて話せば、相手は納得してくれる。これは私の経験からも間違っていない。

<元島栖二>

大きなことをするには、異質な物も集めて一つにまとめて上げていかなければなりません。異質なものを集めるとは、多様性を認めるということです。多用性を認め合うことは、物事の出発点だと思います。これがないと、国際間の交渉はできません。この多様性を認め合うことが、経済発展の出発点だと感じています。



久し振りに参加した
応援団の元島先生

塾長講話 「フェイクニュースの恐ろしさ」

嘘と真実 見極める力を

今日は、前回7月に引き続いて、NHKの「クローズアップ現代」のフェイク・ニュース特集を見た後、フェイクニュースについて考えたいと思います。フェイク・ニュースは、情報操作ですから、政権すら転覆させられるほど大変恐ろしい代物です。私たちは怖い時代に生きていることを自覚してほしいのです。何が真実で何が虚偽なのか、これを見極める力を養ってほしいのです。

その前にお伝えしたいことがあります。新たに応援団の御一人で、(株)パスポート社長の濱田総一郎さんに、副塾長をお願いすることになりました。これまでの副塾長は、志村先生、谷川先生、杉江先生、4月から前事務局長の三

田さんをお願いしております。志村先生は天才肌の科学者ですが、とても忙しい。谷川先生は筑波大の副学長をされた方で、学長にと頼まれたのですが、その話を断って大学を去り、今は作家として活躍しながら恩師が担っていた地名学会の会長に就いて、これまた大忙しです。本人は「生き方塾」にずっと寄り添いたいと話しており、機会があればまた講義したいと言っています。杉江さんは母校の北大で理事・教授を務めるなど、忙しい。こうした事情から濱田さんをお願いした次第です。

濱田さんは、皆さんご承知の通り、3月の小泉さんの特別講演で八面六臂の活躍をしたほか「生き方塾」の運営に

積極的に関わって下さっています。「盛和塾横浜」の代表世話人もされたほか、私が主宰する「心を高める坐禅の会」の主力メンバーでもあります。こうしたことから、私が信頼し、頼りにしている濱田さんに副塾長をお願いした次第です。

【濱田さん挨拶】

尊敬する下村塾長からのお誘いですから、断るわけにはいきません。塾長を見ていると、本気で、情熱を持って物事に当たれば、その思いはみんなに広がる。塾長はそれを具現化していると感じています。まさに山川草木悉皆成仏なのです。大したことはできませんが、「生き方塾」のために微力ながら頑張りたいと思います。



副塾長に就いた濱田さんが抱負を披露

【DVD クローズアップ現代「“ロシア疑惑”情報戦の深層」上映】

トランプ大統領の就任から半年。アメリカは“ロシア疑惑”に揺れ続けている。最近では、大統領選挙にロシアが干渉していたとする政府機関の調査が次々と明るみに出た。選挙期間中、ロシアのハッカー集団は、全米20カ所以上の選挙システムを標的にしていたことが分かった。さ

らに、プーチン大統領とつながりの深いロシア国営の国際放送局が、トランプ氏に有利になる情報を放送し、ネットを通じて拡散させていた。現地から最新情報を報告する。(NHK番組宣伝から引用)

● 米大統領選へロシアが介入

世界に衝撃を与えたトランプ大統領の登場から半年。深まる社会の分断。その予測不能な行動は、世界にも大きな影響を与えています。ロシア疑惑で足元が大きく揺らぐ今、トランプのアメリカはどこへ行くのか？

—— 今日(2017年7月11日)から3日間お伝えする、シリーズ「トランプのアメリカに行く」の1回目は、トランプ政権を足元から揺らし続ける、ロシア疑惑の最新報告です。トランプ政権とロシアとの不透明な関係を示すロシア疑惑。焦点は、大きく3つです。

まずは、大統領選挙中、トランプ氏の有利になるよう、ロシアがサイバー攻撃などを仕掛け、選挙に干渉したのではないかという疑惑。そうした背景に、トランプ氏の側近らと、ロシア側との共謀があったのではないかという疑惑。さらに、疑惑を捜査していたFBIの長官をトランプ大統領が突然解任。司法妨害を行ったのではないかという点です。そして今、アメリカで注目されているのは、一連の疑惑の発端であるサイバー攻撃の実態です。

● “ロシア疑惑”サイバー攻撃の実態

先週開かれた、G 20 サミット。世界の注目を集めたのは、初の首脳会談を行ったトランプ米大統領とプーチン露大統領です。

トランプ大統領は、「アメリカとロシアの関係が、良い方向に向かうことを期待している」。しかし、就任から半年の今、トランプ大統領の弾劾を求める声は後を絶たず、全米各地で「トランプ大統領を弾劾しろ」と抗議デモが繰り返されています。

デモの参加者は「彼には大統領の素質がない。ひどい男だし、クレイジーだわ」と異口同音に語り、「ロシアゲートは懸念材料か？」との問いに、「それも含め、彼の全てが信用できない」。

混乱の原因の1つは、大統領選挙にロシアが干渉していたことが、次々明らかになっていることです。中でも波紋を広げたのが、選挙直後の1月に、CIAやFBIなどが発表した、「ロシアが、トランプ氏のライバル民主党のクリン

トン候補を標的にしたと、断定した」という報告書でした。民主党のヒラリー・クリントン候補が有利とみられていた大統領選挙でしたが、その最中、内部告発サイトのウィキリークスに、民主党幹部らの数万通にもおよぶメールが流出。中には、クリントン氏のイメージを損なう情報も含まれ、民主党は大混乱に陥りました。トランプ氏は、こうした状況を巧みに利用しました。

2016年6月、トランプ氏は、「これを見てくれ。アイラブ ウィキリークス。さてさて、嘘つきヒラリーがスピーチで言っていたことは、やっぱり全て嘘だったようだ」。

メール流出の背後には、あるハッカー集団が暗躍していました。民主党の依頼を受けて調査にあたったセキュリティー会社の報告によると、ハッカー集団の名前は「APT 28」。その活動拠点は、ロシアで、長年、このハッカー集団を追いかけてきたセキュリティー会社の責任者は、「ただの犯罪集団ではない」と指摘します。

セキュリティ会社の調査担当ジョン・ホルトクイスト氏は、「この集団は、非常にカネのかかる手法で、世界規模で長期的な攻撃を仕掛けています。並の犯罪とは規模が違います。ロシアが国家レベルで関与していることは、疑う余地がありません」と断言しています。

そして先月（2017年6月）、さらなる衝撃の事実が明るみになりました。アメリカ国家安全保障局（NSA）が極秘裏に調べていたロシアのサイバー攻撃の実態が、ネットメディアを通じて報じられたのです。極秘の報告書には、ロシアのハッカーが、大統領選挙中に、全米の選挙システムを標的にしていたと記されていました。議会の調査では、ハッカーの攻撃は、広い範囲に渡っていたことも分かりました。

国土安全保障省の高官は、「現在、把握しているだけでも、21の州の選挙システムが、サイバー攻撃の対象になりました」と語る。

攻撃を受けた州の一つ、イリノイ州選挙管理委員会のケネス・メンゼル法律顧問は、「有権者の情報が登録されたデータベースのシステムに、侵入されました」。狙われたのは、投票の4ヶ月前。システムが勝手に動き出し、有権者9万人分の個人情報をごく勝手に送信していました。選挙システムに侵入され、勝手に操作されたことに衝撃を受けた、と話しています。メンゼルさんは、「攻撃に気付いたときは、非常にショックでした。ロシアからハッキングされるとは、想像もしていなかった」と悔しがります。

今のところ、選挙結果への影響は確認されていません。しかし、本来侵入されてはならない選挙システムが攻撃された事実が、アメリカ社会に大きなダメージを与えた、とメンゼルさんは見えています。「システムが攻撃された影響は、計り知れません。有権者が選挙システムを信頼し、その結



「クローズアップ現代」のDVDで情報戦の実態を学ぶ

果を受け入れることができなければ、民主主義は崩壊してしまいます」

プーチン露大統領は、今回のサイバー攻撃への関与について、「国家として我々は全く関与していません。これからも関与するつもりはありません。愛国者が、ロシアを悪く言う人に対して、勝手にやったことでしょう」と否定しています。

大統領選挙の結果に、大きな疑念を抱かせたサイバー攻撃。アメリカ政府の中核でサイバーセキュリティに携わってきた人物は、その波紋は国内にとどまらないといいます。オバマ政権時の元大統領特別補佐官だったマイケル・ダニエル氏は、「最初に思ったのは、『ついに起きたか』ということでした。今回だけでなく、今後の選挙や世界でも脅威になることは間違いありません。同じような混乱をもたらしたいと、手口を真似する勢力が現れるでしょう」と警告しています。

● 民主主義の根幹揺るがすサイバー攻撃

民主主義の根幹を支える選挙システムへのサイバー攻撃。その真の狙いは何か。指摘されているロシアの関与はどこまであったのか。ロシアによる情報戦の専門家、モリー・マキューさんに話を聞きました。

Q：この選挙のシステムに侵入を許し、情報が盗み取られた。このことは、アメリカ社会にどんなダメージを与えた？

マキューさん：侵入を許したことに加えて、アメリカ国民がその事実を知ったことが、問題なのだと思います。それにより、アメリカの人々の間には、選挙そのものへの不信感が生まれ、不安定な状況に陥っています。

Q：ロシアが関与していた疑いが強いといえる根拠は？

マキューさん：今回の選挙について、アメリカの諜報機関が、はっきりとした声明を出しています。諜報機関がこうした攻撃について、誰がやったのかを断定するのは、非常にまれなことです。通常だと可能性をほのめかす程度ですが、今

回はロシアの関与を公式に発表しています。このことから、大統領選挙へのロシアの干渉は、かなり確実だと思います。

Q：民主党のメールが大量に流出した問題では、ロシアのハッカー集団が関与したとされているが、ロシアのハッカー集団とロシア政府の関係は？

マキューさん：ロシアには、サイバー技術に非常に詳しい人たちが存在します。優秀なプログラマーやハッカーゲーマーなど、ロシアの諜報機関は、必要とあらば、その優秀な技術者たちを動員することもできるでしょう。彼らは暗黙の命令のようなものを理解して動きます。クレムリンから指示があれば、断ることはできませんし、断るリスクも考えるでしょう。

実際に、ポーランドやジョージアなどの国でも、これらの技術が使われました。それにより、ロシアに反目する政党や政治家などの信頼が失墜させられ、政治の世界から引きずり降ろされたと見られています。これらのハッカー集団

が、FSBやGRUといったロシアの諜報機関とつながっていることを示す文書も存在するようです。しかし、サイバー攻撃は、より大きな情報戦の1つにすぎません。ロシアからは、様々な情報が発信されています。それらは、人々の考え方や言説、世界に対する見方を変えようとするものなのです。

マキューさんが言う、情報戦とは何か。

トランプ大統領は、自分を批判するメディアを、「お前はフェイク・ニュースだ。誤った、恐ろしい、フェイク・ニュースだ!」と徹底的に糾弾します。その一方で、自分を支持するメディアの情報は、自らのツイッターで賞賛し、拡散しています。

その中に、トランプ大統領が都合良く引用しているメディアとされるのが、ロシア国営の海外向けニュース・チャンネルRTです。モスクワに本部を置くRTは、100を越す国々で放送し、アメリカでの視聴者数は、800万人に上るとしています。

プーチン大統領の肝いりで、2005年に設立。編集長には、国営テレビでプーチン氏の取材を担当した女性記者が抜擢され、政権と深いつながりがあると見られています。アメリカの情報機関がまとめた報告書によると、RTは大統領選挙中、トランプ氏に好意的な報道を繰り返す一方で、クリントン候補を徹底的に批判。「汚職を行い、体も心も病んでいる」と伝えたと言います。およそ220万回再生されたのは、「過激派組織ISの資金提供者が、クリントン候補にもカネを提供しているというんですね」という記者レポートでした。

このレポートを、ウィキリークス創設者のアサンジ氏は、「そうです」と、評価し、この記者も「すごいことですね!」と追随する。

さらに、「クリントン候補がパーキンソン病を患っている」と主張する人物を紹介。しかし、その主張は後に専門家によって否定され、フェイクニュースだと明らかになりました。RTがロシア政府の意向をくんで、社会を混乱させようとしていると指摘する専門家もいます。

アメリカのシンクタンク研究員ベン・ニモさんは、「RTは、公正な報道機関といいながら、実際にはプロパガンダを流し、アメリカを不安定化させようとしています。深刻な問題です」と指摘します。さらに専門家が危機感を持ったのが、トランプ氏が選挙中に、こうした情報を引用するケースが相次いだことです。

2016年9月にトランプは、「グーグルの検索システムが、クリントンについての悪い情報を隠蔽している。とんでもないことだ。それでも私たちは選挙に勝って、ホワイトハウスに行ってみせる」とぶち上げた。検索サイトのグーグルが、クリントン候補に都合の良い情報しか出していないというトランプ氏の主張。この主張は、RTの報道をそのまま引用した発言だと見られています。

2016年3月に放送されたRTの番組に、グーグルを検証したという心理学者が出演しました。彼は、クリントン候補について検索すると、好意的な情報しか出てこないよう



DVDについて解説する下村塾長

にシステムが細工されていると主張しました。グーグルは、こうした主張は事実ではないと、全面的に否定。しかしRTは、この心理学者のインタビューを繰り返し放送し、トランプ氏を支持するアメリカのメディアも大きく取り上げるようになりました。

ニモさんは、「RTは小さな放送局なのに、根拠のない情報を巧みに拡散しました。トランプ氏が引用したことで、非常に多くの人に広がったのです。とても効果的な情報操作でした」と、強調しています。RTの報道の背後にロシア政府の意図があるのか。アメリカだけでなく、ヨーロッパでも同様の疑惑がある中、RTの幹部が取材に応じました。RTのアンナ・ベルキナ広報部長は、「私たちに向けられた疑いは、全く根拠がなく間違っています。批判している人たちは具体的な証拠を示していません。とても残念で皮肉なことです。私たちは欧米の主要メディアと違った視点を伝えようとしています。欧米のメディアは、同じような主張を繰り返すばかりです」と反論し、ロシア政府の関与や情報操作について否定した。

しかし、実体は異なっていたと証言する人もいます。3年前までRTのワシントン支局でキャスターをつとめていたリズ・ウォールさんがそうです。彼女は、RTの報道姿勢に疑問を感じ、退職したと言います。

ウォールさんは、「多くのニュースは、ウソではありません。その中にゆがんだ情報や根拠のない事実を紛れ込ませ、視聴者に気付かれないように情報操作を行っています。何が真実で何が情報操作なのか、分かりにくくしているのです」と説明する。

ウォールさんが担当した番組の1つが、北朝鮮がミサイルを発射した2012年4月のニュースです。この日、普段はニュースの制作に関わっていないロシア人スタッフが、突然番組に介入。北朝鮮のキム・ジョンウン氏を尊敬するという人物を出演させ、「アメリカは、北朝鮮を経済的脅威だと恐れ騒いでいるだけです」と、一方的に、アメリカ政府を批判したというのです。

ウォールさんは言います。「RTでは、常識を超えた過激な意見を持つ人たちをゲストに呼んで、ゆがんだメッセージを伝えることが少なくありません。アメリカのイメージを悪くするためです。欧米の国々がもはや機能せず、崩壊寸前であると伝えたいのです」と。

● ロシア疑惑を否定するトランプ氏だが

ロシアのメディアの情報操作やサイバー攻撃。トランプ陣営との共謀はなかったのか。

トランプ大統領は、「共謀はなかった。誰もがそう考えている。うがった見方をしているだけだ。ばかばかしい」と、ロシア疑惑に対して、否定を繰り返しています。

マキューさんは、このRTがアメリカの世論に、どの程度影響があるかについて、こう説明しています。

「RTは、英語で放送することで成功しました。通常のメディアにはない視点のニュースを見たいという人たちに、英語で情報を提供し、世界各国に広がっています。アメリカでは、極右のメディアがRTなどに関心を寄せるようになりました。ロシアのメディアに賛同し、その情報をネットで再発信しています。そこから保守系の大手メディア・FOXニュースなどにも流れていきます。その結果、ロシアの政策を支持する人が増えました。最近の世論調査にも、それが大きく反映されていると思います。トランプ大統領の支持者の間では、プーチン大統領の人気も高まっています」。

トランプ大統領自身が、RTから発信された情報を演説などで引用しているが、国民は、これをどういうふうに見て止めているのかについて、マキューさんは「プロパガンダ機関の情報を引用したことに、とても不安を感じます。トランプ氏は、これまでのどの大統領よりもメディアに長時間接触しています。毎日4、5時間もニュースを見ていると言われています。さらに、ツイッターも積極的に利用しています」。

そうした彼を狙って、ロシアは特定の情報をネットに流

していると考えています。トランプ氏が関心を持ちそうな情報を仕掛けているのです。こうした情報をトランプ大統領がさらに拡散すると、さまつなことで突然大きなニュースになります。大統領選挙でも影響を及ぼしましたし、アメリカ社会に大きな分断を生み出しています」と警鐘を鳴らしています。

私たち自身も、知らず知らずのうちに、さまざまな情報操作を受ける可能性がある。どういう態度で、日々そういった大量の情報に接していけばいいのかという疑問に対して、マキューさんは「どのような情報に接しているのか、私たちはもっと注意して見つめなければなりません。フェイスブックに載っている記事の情報は根拠があるのか。確認もせずに信じることがあります。情報源を確認しないことに慣れてしまったのです」。

国家同士の情報戦は見えにくい所で行われています。いわば、影の戦争です。何が起きているのか、はっきり分かりませんし、すべてが隠されています。深刻な事態です。民主主義が危機に直面していると思います」と忠告しています。

アメリカを揺るがす、ロシア疑惑。その真の脅威は、サイバー攻撃やフェイクニュースを通じて人々を分断し、民主主義に対する信頼を損なわせることにある、とマキューさんは言います。その秘かに進行する影の戦争が事実だとしますと、私たちもまた、情報の海の中で何を信じ、どう行動するのか、注意深く考えていかなければならないと思います。【DVD終了】

塾長講話再開 「フェイクニュースの恐ろしさ」

国交さえ壊すフェイクニュース

フェイクニュースもいろいろありますね。前回は、効かないサプリをさも効くように訴えるフェイクでしたが、今回見たDVDでは、フェイク・ニュースによって国家転覆さえ出来るというような、とても恐ろしい陰謀すらあることを知って欲しくてDVDを見ていただきました。流しました。単純な偽情報とは異なり、国際情勢をもフェイクニュースで動かされてしまう恐ろしさがあり、もはや無視できない存在になっているのです。日本だって、相当やられていると思いますよ。

そもそもこうしたITの世界は、グーグルだのフェイスブックなどアメリカが大元だったのですが、その大元がやられているわけですから、他の国では太刀打ちできないのではないのでしょうか。

皆さんは多分知っていることと思いますが、ワシントンのピザ店が、1人の男によつて襲撃されました。アメリカ大統領選の最中です。これはテロではありません。このピザ店は児童買春や児童に対する性的虐待の拠点になってお

り、その運営の元締めはヒラリー・クリントンだというフェイクニュースを信じ、これは許せない、児童たちを救わなければと、その男はピザ店を襲い、銃を乱射しました。男には幼い女の子がおり、ノースカロライナから車で6時間程掛けてワシントンにやって来たのです。幸い死者は出なかったのはよかったのですが、こうしたデマを信じる方も信じる方です。しかし、場合によっては、フェイクニュースが殺人の大本になるわけですから、とても怖い話です。

もう一つ。中東のサウジアラビアとカタールが国交断絶というニュースが流れた時私は、エーッと思いました。これも雇われハッカーが流したフェイクニュースが原因だったようです。雇われハッカーは決して少なくなく、フェイクニュースがビジネスになっています。

趣味でフェイクニュースを面白がって流している人がいることは前回紹介しましたが、この人物はフェイクニュースにクリックが多いとお金になることを知って、フェイクニュース作りを本業にしてみました。月に1万ドル余り

を稼いでいるのだそうです。政治的な思惑で流すフェイクニュースとお金のために流すフェイクニュースと、いろいろありますが、最近はフェイクニュースの定義が辞書に掲載されるようになりました。

たまたま見たオーストラリアの辞書の定義は「政治的目的や、ウェブサイトのアクセスを増やすために、配信する偽情報やデマをフェイクニュースという」とあります。さらにソーシャル・メディアで拡散される情報もあります。ちょっとおかしいと、誰も見向きもしなかった情報も、トランプ大統領が、自分に都合良いと思ってツイートすれば、瞬く間に拡散し、インパクトを与えます。トランプの言うことですから、メディアは取り上げますので、その間違っただけの情報でも再生産されて、また広がります。今はそういう危うい時代になっているということです。

私はジャーナリストですから、フェイクニュースが世界を動かしていることは認めたくないのですが、政治的意図を持ったフェイクニュースは、多数の合意で成り立つ民主主義の根幹を崩していく怖いものなのです。

朝日新書から、平和彦さんという若い記者が「信じてはいけない 民主主義を壊すフェイクニュースの正体」を出版しました。この本では民主主義がフェイクによって壊されることが怖いと書いていて、私も全く同感です。民主主義の権化であるアメリカにおいて、トランプ大統領はフェイクと知りながら、色々ツイートしています。さらに大統領のフェイクニュースを追及するメディアに対して、「あなた方がフェイクニュースだ」と言って、CNNやニューヨークタイムズを誹謗しています。ある程度勉強した人たちは、トランプに発言をバカにしていますが、トランプを支持する貧しい白人労働者たちは、トランプのツイートを信じてしまっています。それがアメリカの現状だと思います。

民主主義、デモクラシーとは、皆さんが学校で学んだように、異なった立場、異なった意見がある中で、議論をしながら、一定の合意に達するように努める仕組みです。少数意見にも耳を傾けよう、切り捨てない、声のでかい人だ

けの意見に惑わされない。決まったことはみんな守っていかう。それが民主主義です。

北朝鮮が民主主義の国ではないという理由は、あの国はキム・ジョンウンだけの意見しか通らないシステムの国だからです。民主主義の社会では、それぞれが情報や知識を集めて、自分の考えを表明します。そうした中で、全く嘘の情報やデマを根拠に判断するとしたら、民主主義は成り立ちません。偽情報に基づいた議論では、どうしようもないからです。それが今起きている恐ろしいことなのです。先程話したピザ屋襲撃事件だって、大量殺人事件になったかもしれない。彼はフェイクニュースを信じて、真面目な気持ちでワシントンまでやって来ました。ですから、DVDが最後に言っていたように、知らない間に我々だって操作されているかもしれません。



フェイクニュースの恐ろしさを説明する下村塾長

サウジとカタールが国交断絶したきっかけは、カタールの国営放送が「カタールの王様が、イランに対して好意的な発言をした」と報道したというフェイクニュースが流されたことにあります。実は、カタールの王様のイラン寄り発言自体がフェイクですし、国営放送が報道したというのもフェイクだったのです。で、そのフェイクニュースをネットで読み、イランを敵だと考えているサウジアラビアが、クウェートに対し怒り、断絶したのです。

● 雇われハッカーが発信元

よく聞いてみると、フェイクニュースを流したのは雇われハッカー。最近はフェイクニュース作りを飯の種にしている「フェイクニュース・ライター」という言葉さえあるそうです。ピザ店についてのライターを雇ったのは、ロシアだという説があるのですが、もっとすごいのは、サウジアラビアが意図的にフェイクニュースを書かせ、国交断絶をするような状況をでっち上げた、というフェイクニュースが流れたのは夜中なのに、わずか20分後に、「カタールの国営放送が、カタールの王様が、イランに対して好意的な発言をした」と報道したと報道したそうです。そして、サウジはカタール以外の中近東の諸国を味方につけ、イラン包囲網を作り上げました。誰がフェイクニュースを流したのかは、依然として分かっていません。このように、政治がらみのフェイクニュースは単純ではありません。

今やフェイクニュースを流すサイトはたくさんあり、ピ

ザ屋が児童買春の拠点で、ヒラリーが元締めだと流したサイトは、古くからあるサイトとして有名で、古いものでは2001年の9・11も「実は、ビンラディンがやったのではなく、ホワイトハウスが仕掛けた」というような話を流しました。また「オバマは、アメリカ人ではないから大統領になる資格はない」という話も流していました。このように荒唐無稽なニュースを流すサイトですが、しかし、メディアに通じていない単細胞な人は、そうした話を信じてしまうから怖いのです。

最近では、何とかしなくてはならない、とフェイクニュース対策を考えているNGOもできて、フェイクニュースを悪い意味で格付け、最悪から辛うじて許せるものまでに仕分けているというニュースを見ました。

最悪で危険なコンテンツは、騙そうする意図が強くて極めて政治色の強いもの、つまり捏造したものです。アメリ

力大統領選でのロシアの民主党をターゲットにしたフェイクがそれです。次に悪いのは、なりすましコンテンツです。誰かになりまして、他人の名前を使って発言するのも一種のフェイクニュースです。三番目は見出しや映像が、書かれている内容とは全く無関係のものです。目を引くために、アクセスさせるために、センセーショナルな見出しや映像で釣るわけです。中身を読まないで、すごいことが起こっていると思わせ、拡散させるのです。

一番弱いというか、フェイクニュースなのかと議論があるものが、風刺とかパロディです。イスラムのムハンマドを風刺した漫画を出したとして、フランスのシャルリー・エブド紙の風刺漫画家シャル・ボニエが殺されましたね。漫画がけしからんと怒りを買って、殺されました。風刺が重大犯罪を惹起するのです。

繰り返しですが、一番怖いのは、政治的意図をもってフェイクニュースを流すことです。フェイクニュースによって体制を壊したり、逆に体制を作ったりします。先程のサウジがそうです。これが一番危険です。

アメリカ大統領選で、ローマ法王がトランプを支持したというニュースが流れたことがあります。だけどよく見ると、空想ニュースサイトとあるのです。この人は、お遊びのつもりで流していたのでしょう。この人は、これとは全く逆に、法王がヒラリー・クリントンを支持しているとも流しています。この人にとっては、大統領選はお遊びなのです。でもお遊びでやっても、それが怖いのは、常識で考えれば、

ヒラリーが児童買春に関わるはずはないのに、フェイクをすんなり受け入れる人がいるということです。

お遊びにしても、なぜフェイクニュースが流行るのか。

政治的意図は論外ですが、それがお金になるからで、それが問題なのです。つまりアクセスが多いとお金になるからで、アクセス数増やしのためには、手段を選ばない。目立たせればいいと、フェイクを作るのです。ローマ法王がトランプを支持すると聞けば、みんな「へーっ」と驚き、サイトを開きますよね。だからフェイクニュースにはいろんなものが、ごちゃごちゃに入り混じっています。

問題はそのフェイクニュースを、有名人、さしあたりトランプさんがツイートに使える、みんなが一体何のんだろうかと見ることによって、あっと言う間に拡散することです。その効果を狙ってトランプは、フェイクを利用しています。ロシアも、トランプならきっとこれを使うだろうと計算した上で、トランプが喜びそうな素材を使ってフェイクニュースを流すのです。餌を与えられたトランプは無意識にパクパクと食べているわけです。それが1年前、大統領選の真ただ中 2016 年夏の姿です。

怖いのはフェイクニュースの拡散です。ツイッターやフェイスブックなど、ソーシャルネットワーク上を、「こんな見出しの記事があるよ」と拡散する。それを誰も止められないし、フェイクの誤りを訂正もできません。既存のメディアとは違う世界が展開しているということです。

● 何でもありでアクセス数確保

アクセス数確保のためには何でもありの世界ですから、反トランプの集会では参加者に 3500ドルをくれた、というフェイクニュースが流されました。このフェイクニュースがトランプに大きく有利に働いたといわれています。このニュースを見たトランプ支持者はみんなに、パーッと拡散します。ちょっと考えれば、集会に参加した一人に 3500ドル、円換算で 40 万円近くを払うはずはありません。情報操作、ロシアの謀略に乗ってトランプは勝利した、というまとめは、ある程度正しいと私は思います。誰もが、まさかと思ったトランプの勝利は、フェイクニュースが後押しして、今やフェイクニュース・ライターが職業として存在しているわけです。

で、トランプや周りの人たちも「フェイクニュースの何が悪い」と居直り、フェイクニュース・ライターたちも、「大手メディアの記者だって、誤報することがあるじゃないか」と、詭弁を弄しています。こういう手合いに騙されるのは、知的好奇心が小さい人たちですが、私たちも、「新聞にこう書かれている」「テレビでこう言っている」と言いますから、決してよそ事ではありません。自分が書かれる立場になって初めて、いい加減だなと感じることがあります。

私ごとですが、ある週刊誌から取材をされた時、気になってゲラを見せてもらいましたら、発言、真意が全く逆に書かれていたのです。訂正をしたら、その通りにしますと返事したにもかかわらず、掲載された記事は、元のママ。既に印刷されていたのです。初めから、そういう記事にする

つもりでいたのです。私はメディアの人間だから、私から「ゲラを見せる」と言われれば見せるしかありません。しかし、はなから直す気はなかったのです。日本の週刊誌でも、フェイクニュースは少なくありませんが、「週刊誌に載っていたわね」と話題になれば、検証することなくそれを知り合いに教えますから、情報は拡散し、その週刊誌も売れます。程度の差はあれ、私たちもアメリカと同じようなことをやっているわけです。

人間というのは、信じたいものを信じる性質があるから、自分が知りたいこと、共鳴できるようなことが書いてあると嬉しくなって、さらに読み込んでいきます。私も「自分と同じ意見だ」と思って、同じような傾向の記事を読んでしまします。人は信じたいものを信じる性癖があるから、自分と同じ考えを示すニュースを喜んで読み、納得します。それは違くと批判されると、依怙地になって、ますます自分好みのニュース、情報に走っていきます。

これも初めて聞いたのですが、嘘でもいいから、人目を引く見出しや映像でアクセス数を増やし、ひと儲けしようという動きを「デジタル・ゴールドラッシュ」と言うそうです。こんな言葉があるほど、何でもありの情報が溢れています。こうした時代に生きる私たちは、情報、ニュースの真偽をどうやって見極めたらいいでしょうか。

これは非常に難しいことだと思います。ロシアのフェイクニュースは、お客さんの要望に応じて「フェイクニュース・

ライター」が書いて、雇われハッカーが流しています。彼らはプロですから簡単に尻尾は出しません。フェイクニュースには値段まであって、一番安いのは3000円ぐらいで、それがバーンと拡散すると300万円ぐらいに跳ね上がるそうです。クエートとサウジのような関係を生み出すようなニュースは、4500万円ぐらい。個人で出すには高いものですが、4500万円で相手国にダメージを与えられるなら、国としては安いものです。

こうしたフェイクニュースの洪水に、ジャーナリストも、どうしたものかと模索していますが、決め手はない、と私は思います。私たちは情報に対して余りにも受け身なのです。与えられたものを鵜呑みにする。誰かから聞いた話、ネッ

トに出ていた話、テレビが放送していた話、週刊誌に出ていた話など、自分が直接かかわった情報、つまり一次情報ではありません。

少なくともまともな私たち、ジャーナリストは、間接情報では、決してニュースは書きません。間接情報は取材のヒントにはなりますが、当事者に直接会って、事実を聞き出したうえで記事にします。間接情報は、確認しないと大火傷をしがちです。「ために」流す悪意のこもった情報も少なくありません。新聞記者だったら、情報を確認しなければならぬのに、最近の記者はゆとりがないせいか、確認作業が足りず、不確か情報で記事を書き、指摘されて訂正するケースもあります。

● スローニュースに関心を持つ



部長の話聞きいる塾生たち

かつての政治記者は、夜討ち朝駆けといって、政治家の自宅を訪ねて事実を知るため、ねちっこく取材しました。ところが最近の記者は、会見の際、滅多に質問しません。まして再質問などはありません。勉強不足に加えて、デスクからスピードと情報量を求められ、会見を聞きながらパソコンを打つ。さらに政府筋からは質問しない記者はいい子、と褒められる。言い換えれば、甘く見られているわけですから、権力にとって不都合な情報などは報道されません。情報操作もこれでは楽なことです。

この前、毎日新聞を読んでいたら、面白い記事がありました。

「現代社会は便利過ぎるか、便利で良いか」、という質問を読者にアンケートしました。その結果は50代以上の人は便利過ぎと答えています。どこに行ってもコンビニがあり、料理でも何でもある。若い人にとっては、それは当たり前のことですが、中高年にとっては、これでは自分で考え行動するということがなくなる「思考停止状態」になってしまう、ということです。例えばコンビニ弁当の味は濃くて、一律です。これでは味覚がおかしくなるし、料理することがなければ、思考力低下を進めるだけです。それに地域によって違う味を楽しむこともできません。日本人の味覚の低下は、コンビニ弁当にも一因があると思います。

さきほど元島先生は、多様性とおっしゃいましたが、それは自分の価値観で判断し行動するから発揮されるのです。これ、何かおかしいな、と感じる直感は意外と正しいのですよ。

私はインタビューの名手と呼ばれていますが、インタビューは短時間でその人物の本質に迫り、本音を引き出さなければなりません。ちょっとおだてればベラベラしゃべる人、なかなか口を開かない人と、いろんなタイプがありますが、その人の性格を見抜いて取材の方法を変えるのです。多用性に応じて、こちらもそれに合わせていくのです。多用性があるから、人間は面白いのです。

松下幸之助さんをインタビューした時です。彼は本も書いているし、インタビュー記事は掃いて捨てるほどあります。今さら何を聞けばいいのかと迷いましたが、読んだ本や記事は、一端捨てることにしました。それは私の目を通した松下幸之助ではないからです。本を読んで知ってはいることでも、何も知らないふりをして、質問しました。答えは分かっているのですが、「どうしてですか?」「どうしてですか?」と、質問を重ねていきました。すると松下さんからは、それまで誰も書いていない、新しい内容の返事が、次々と返ってきました。「どうして?」と何度も聞かれると、湯水のごとく深く、新鮮な答えが出てくるのです。一問一答でないから、面白いインタビュー記事になったのです。財界人の取材はこの手法を取り、私の連載は大好評でした。

私は好奇心が強いので、「どうして?」「なぜ?」と聞くのが楽しいのです。大きな太鼓も、叩く人の力がなかったら小さくしか響きません。しかし、大きな太鼓を力強く叩けば、大きく響きます。インタビューも同じです。相手は大きな人なので、大きく叩けば、大きな返事が返ってきます。それは、インタビュアーの力量によります。

今、思考停止した人が多くなり、このまま進めば、考えることはAI人口知能に任せよう、という動きすらあります。考えない人間って想像もつきませんね。判断力もない、問題解決力もない人間ばかりになったら、どうなりますか?「人間力」とは、おかしい、これを何とかしないとイケない、私はこう思うなど、直感できる能力、考える能力であり、その問題を解決していく能力でもあるのです。

朝日のフェイクニュースについて書いた記者が、テレビ番組の中で、「スローニュース」という考えについて語っていました。「スローニュース」とは、情報発信がスピードと量を求められている現代のメディアに対する、対極の考え

方です。今、私たちは、腐るほど多い情報にげんなりしています。何が正しいのか、何が自分に必要な情報なのか。判断能力を欠いたまま、与えられた2次情報、3次情報の洪水の中で溺れています。時間は掛かっても、当事者に会う、現場には必ず出向く、当事者が書いた本を読むなど、1次情報を掴む。「スローニュース」とは、時間を掛けてそのニュースをじっくり掘り下げて、そのニュースの意味や価値などを書いたり読んだりするスローフード、スローライフと似た発想です。私はとてもいい考え方だと思っています。出来事背景にあるものなどをえぐる解説記事が、最近は少なくなりましたが、解説記事や論評もスローニュースです。テレビ、新聞も垂れ流し記事が多いから、今こそスローニュースが必要なのです。

フェイク・ニュースが多い中、こうしたスロー・ニュースを読み込んで、社会の動きの深層を掴んでいけば、フェイクを見抜く力のメディア・リテラシーが備わってきます。私は以前から主張しているのですが、このメディア・リテラシーは、学校教育でやる必要があると思うのです。

例えば、ニュースはどのようにして作られるかなどです。テレビだと映像が映りますが、その映像は撮影する場所で、何を撮るかで、視聴者の印象が変わります。デモの光景を警察の側から撮るのか、デモの隊列の中から撮るのか。隊列から撮れば警察の強引な規制が見られますが、警察側から撮ればデモの無鉄砲な行進が映ります。

映像が怖いのは、限定の一部分でしかないのに、処理によって全体であるかのように印象付けられることです。こうしたメディアの特徴を教え込まないと、何でも信じる思考停止の人たちが続出するからです。新聞社に行けば、埋まるほどあるニュースの中から、どのようにしてニュースを選び、決められた紙面スペースの中で見出しの大小が決まるか、などが分かります。見出し一本で記事の印象が変わることも分るはず。だから私は5紙を購読しているわけで、同じニュースでも右から左まで、新聞によって記事の扱い、書き方は全く違うことが分かります。見る位置で、事件の様相は変わります。

火事でも交通事故でも、現場に駆け付けて書いた記事は、記者によって微妙に違います。それは誰に話を聞くのか、通りすがりの道を歩いていた人に聞くか、運転していた人に聞くか、助手席に乗っていた人に聞くかで全く話す内容は違います。その人がいた場所で、視覚に入ってくるものが違うし、その人の思い込みもあります。ですから、真実というのは、そんなに簡単にものではないのです。昔、黒沢明監督の映画に「藪の中」というか「羅生門というものがありましたね。皆さんはよくメディアは「真実を伝える」とおっしゃいます。私たちは真実に向けた努力をしますが、百パーセント真実を確実に手にするのは難しいのです。

私が尊敬するアメリカのジャーナリストに、ハリソン・ソールズベリーさんがいます。彼はベトナム戦争を取材している時、アメリカ側からの戦争だけを報道するだけでは一方的な内容になってしまうと、北ベトナムに行きました。すると北側で見るベトナム戦争は全く違っていました。彼がすごいのは、ベトナム戦争を両サイドからちゃんと書いたことにより、「アカ共産主義者」と言われ徹底的にバッシングされて、干されました。ピューリッツァ賞も取上げられた。

私がハーバード大学でニーマン・フェローとして勉強させていただいた時に、彼の講義を聞きました。今でも忘れないのは、「真実は、神のみが分かっている。我々ができることは、限りなく真実に近づくために、死に物狂いの努力をすることしかない」という言葉です。つまり謙虚にしておごらず、とはそのことです。真実を見ているのは神様だけです。

だから今日、同じ部屋で同じ話を聞いていても、後ろの席の人は私の細かな表情までは分らない。よく見えるのは前の席の人の背中でしょう。このように、同じ所にいて同じものを見聞きしても、目に入るものは違う。ジグソーパズルのどのピースを見ていたのか、ということです。真実に迫るとは、異なった意見にも目を向けて、幅広く取材することです。このようなメディア、報道の実態について、学校はきちんと教えてほしいのです。塾生の方々も、これまで話してきたことに注意しながら、ニュース、情報に接してほしいのです。

田原総一郎さん 応援団講義

日本はアメリカの植民地

まず原発問題について話しましょう。1975年の頃です。私は原発銀座と呼ばれていた福島県の大塚地方を取材していましたが、原発立地を進めていた町から取材を拒否されました。当時の大塚地方は福島県のチベットともいわれ、貧しい地域でしたから、原発をテコに活性化させたいと自治体は考え、電通はこの動きを加速するために、原発誘致運動を進めていたのです。このことを「原子力戦争」という企画で報道しようとしたら、電通からクレームが付き、大慌てした社（テレビ東京）から、「取材を止めるか、会社を辞めるか」と迫られ、私は1977年1月、社を辞めました。



応援団の講演をする田原さん（左）を紹介する下村塾長

原発にはこうした闇が付きまわっているのです。だから小泉さんらが主張するように、原発は直ちに止めればいいのです。

北朝鮮の核問題に触れます。北の核実験、ミサイル発射に対して国連は制裁決議を採択していますが、内容は骨抜きです。それを見越して、北は昨日（2017年9月15日）、制裁に抗議する形でまたミサイルを発射しました。

日本はどうすべきなのか。8月末、安倍首相に会った時、私は安倍さんに「このままアメリカと北が戦争に入ったら、日本と韓国は北にやられてしまう。だから渡米してトランプに会って、どんな条件ならアメリカは北と対話できるか、という条件を引き出す。次に習近平に会って、アメリカの意向を伝え、その後プーチンに会い、最後に韓国へ行き対話の条件を示せば、北とアメリカの対話は実現し、北の脅威は小さくなる」と助言しました。

この安倍さんとの会談はメディアに知られたため、私は記者団に「安倍さんには、政治生命を賭けて冒険をしないで、と言ってきた」と話しました。

アメリカの立場は、北が核を廃棄しない限り、対話はできないという姿勢で、一方北は、アメリカに対して、『核保有国』と認めてほしいわけですから、核を捨てる気はありません。

北はフセイン政権のイラクとアメリカが戦争した時のことを、教訓としています。あの時、アメリカは、イラクが大量破壊兵器を持っているとの理由でイラクを攻撃しました。

核兵器がなかったから、イラクは攻撃を受けたと、北は思い込んでいるのです。

2001年、当時の小泉首相は北を訪ね、それが契機となって03年から北の核開発をストップさせるための、日、米、中、韓、北による6か国協議が始まりましたが、北は内密で核開発を進め、06年に核実験をしたので、6か国協議は中断して現在まで続いています。

あの核実験は、ロシアが核技術を提供し、中国は開発を黙認していました。つまり日米はだまされたわけです。この苦い経験があるので、アメリカは核廃棄が対話の前提といっているわけです。もし、アメリカが北を攻撃すれば、北は韓国と日本を報復攻撃し、アメリカを攻撃しません。

こうした経緯や背景から、私は安倍さんに、中国は10月に党大会をやるので、それが終わったら中国に行って、習近平に会うべきだと言いました。習主席は経済面で大きく日本に期待しているから、日本の言うことは聞かはず。それは尖閣諸島問題以降、日本は中国に投資をしていないから、投資を条件に北の説得をできるからです。さらに、北を核保有国と認めれば、韓国は核保有を要求するし、日本も核保有を目指します。日本が核を持てば、中国にとって日本は脅威になる、と安倍さんは言うべきだ、と思うのです。トランプ大統領は11月に中国を訪ねますが、その前に安倍さんが行くべきだとも言いました。なぜなら、アメリカより早く行けば、中国とアメリカは手を組みやすくなるからです。

● 政権交代しにくい日本の政治

国内問題に話題を変えます。

先進国の中で、日本ほど安定している国はありません。昨年の米大統領選で、メディアは、プア・ホワイトを苦しめているグローバリズムの影響を読み誤りました。

1970年代から80年代にかけて、日本は経済大国として世界に打って出ていました。それに対し、アメリカのレーガン大統領、イギリスのサッチャー首相らは、全ての規制をなくせと主張しました。彼らは、日本は政府の保護政策や円安ドル高誘導によって、輸出を伸ばし、その一方、障壁

を設けて輸入を制限していると力説しました。ロシアもペレストロイカによって、アメリカと共同歩調を取り、共通の敵は日本だと決めつけました。

1985年のプラザ合意は、欧米各国が日本に円高への方向転換と内需拡大を迫るものでした。当時は1ドル240円で、合意の1年後には円は130円台までに急騰しました。その結果、内需拡大、国際的に調和のとれた産業構造への転換、市場アクセスの一層の改善と製品輸入の促進、国際通貨価値の安定化と金融の自由化・国際化、国際協力の推進と国際的地位にふさわしい世界経済への貢献、などの提言をまとめた「前川リポート」になりました。前川さんとは当時の日銀総裁です。

日本が導入しろと迫られたグローバリズムとは何でしょうか？人、カネ、モノ、情報は自由に世界を飛び回り、企業は人件費の安い後進国に生産を任せて利潤を得ます。この結果、先進国では空洞化が起きてしまい、労働者が劣悪な条件で働かざるを得なくなったり、失業します。

この空洞化、貧しい層に狙いを付けたのがトランプで、彼はアメリカ第一主義を掲げて、国内産業を興せと選挙戦を戦いました。貧しい白人たちは、民主党政権が進めてきたグローバリズムを嫌っていた。ところが、コストカットがメディアの世界でも至上命題のアメリカでは、取材費不足から、アメリカ社会の底辺部を取材できず、ミス報道になってしまいました。アメリカでは、アンチ・グローバリズムが



日本政治の問題点を指摘する田原さん

底辺の主流となっているのです。

EUは理想的な国家像を目指しました。2度と戦争をしない国にするには、①ビザなしで域内を移動できる②関税撤廃③貧しい国には富める国が資金を回すと決め、実行しています。ところが、ソ連が解体して、東欧諸国がEUに加盟すると、貧しい東欧の人々が、ノービザが追い風となって、英、独、仏にどっと押し寄せました。EUはイスラムからの難民も受け入れているから、域内人口の1割は移民となり、イギリスやフランス、ドイツでは、低賃金でも就労する移民によって仕事を奪われた自国民が続出しました。そこに加えて、貧しい国への経済支援もしなくてはなりませんから、国内にうずまく不満が大きくなり、移民禁止を掲げる右翼勢力は力を得ています。トランプも同じように移民に反対しています。

ではなぜ、日本は安定しているのでしょうか。

まず、日本には移民問題がありません。与野党とも移民受け入れには反対しており、欧米に比べて格差が小さい国です。

日本は特殊な国なのです。西欧やアメリカは二大政党制が定着していますが、それは保守系が自由競争の社会を党是とし、一方リベラル系は格差をなくすための規制社会を掲げています。変わりばんこに政権を取らせてバランスを取っているわけです。

日本が特殊な国と言ったのは、保守の自民党の政策自体がリベラルであって、ばらまき予算です。野党の民進党も政策はリベラルですから、アベノミクスへの対抗策を出せていませんから、野党の支持が伸びないのです。原発や安全保障で野党は明確な反対の政策を出せばいいのだけれども、各党の考え方は違うから結集できず、自民の独走を許している。

日本国憲法が制定されてから60年以上経ちましたが、改定はありません。ではなぜ、憲法改定をしないかです。それは、日本はアメリカに国防を任せているからです。日本人にとって、憲法をつくることは難しいのですが、押し付け憲法に体を合わせることは得意です。小泉首相は、「ア

メリカのイラク戦争を全面的に支持」、といち早く宣言しましたが、米国からの派兵要請に対しては、「貴国から押し付けられた憲法によって、水汲みしかできない」と言って、かわしました。

竹下首相は首相に就いた時、「自衛隊は戦えない軍隊だからいい。軍隊は戦えないのがいいのだ」と言いました。太平洋戦争が始まる前、昭和天皇は軍の首脳に、「アメリカと戦っていいのか」と問いただしたところ、「前途に光明なし」という返事だったのに、戦争になりました。戦えないから平和なのです。戦える軍隊がいいのか、戦えない軍隊がいいのか、です。日本のPKO5原則では、戦闘が起きたら逃げることになっているのですが、スーダンでは逃げなかった。だから戦闘行為があったことを、記録に残すか、残さないかで大揺れしました。

初めて、自衛隊を戦える軍隊にしようというのが安倍さんです。戦うためには自衛隊法の改正が必要であり、集团的自衛権による行動を国会が認めるまでには、うるさく言っていたアメリカですが、法案成立以降は沈黙しています。集团的自衛権を行使するには、日本の存立が脅かされることが明白な場合とありますが、存立が脅かされる明白な場合とは、何を指すのか、曖昧なところがいかにも日本的です。日本は専守防衛を掲げていますが、専守防衛とは本土決戦でありますから、戦争になれば何百万もの方が亡くなります。このように、日本の安保は矛盾ばかりで、極めて無責任です。

安保以上に無責任なのが、原発でしょう。自民党には、原発関係の責任者がいません。かつて民主党では、仙石由人が原発問題を担当していましたが、彼は引退しました。自民党では青森県選出の大島理森が原発問題をやれ、と言われましたが、彼はやんわりと断り、衆院議長に就きました。自民党には、原発問題をやっても票にならないから、引き受ける人物がいません。河野太郎は原発担当を打診された時、OKはしたのですが、菅官房長官が反対し、実現しませんでした。河野太郎は原発に反対の人だからです。

● 治外法権の米軍人

Q：なぜ原発が場無責任なのか？

A：日本の原子力開発は、アメリカからの押し付けで始まりました。原発で発生する使用済み核燃料をどう処分するのか、廃炉はどうするのかといった課題は分かっていたのですが、解決策はきっとアメリカが教えてくれると思って原発を進めてきました。全てアメリカ頼りだったのですが、アメリカは何も教えてくれません。アメリカは核廃棄物の無害化を諦め、それらを頑丈な鉄の箱に封印して砂漠に埋めているのが現状です。

高速増殖炉で再処理した使用済み燃料を消化しようと、「もんじゅ」を作ったのはいいけれど、アメリカは何も教えてくれないから、宙に浮いたまま。アメリカ頼りの原子力開発のツケが、いま回ってきているのです。日本はアメリカの植民地みたいなものです。

Q：なぜ日本はアメリカの言うなりなのか？

A：基地問題が話し合われ、いつも出てくるのが、「日米地位協定」です。この協定は、日本がアメリカの属国であることを象徴しています。さらに、憲法の上には、「日米合同委員会」という組織があります。東京の空は、アメリカに占領されています。300km以上の上空を管理しているのは、米軍なのです。いうならば、日本の飛行機は、アメリカ軍が使わない不便な狭い空域で飛行機を飛ばしているのです。さらにアメリカ軍人は、何をやってもいい治外法権なのです。例えば殺人を犯せば日本の警察が逮捕しますが、すぐに身柄をアメリカに渡し、裁判はアメリカの軍事法廷が行うのです。

Q：原発とアメリカの関わりはどうなっているのか？

A：東日本大震災から1年半後の12年9月、民主党・野田内閣の時です。①2030年以降は原発ゼロ②使用済み核燃料の再処理はしない③大間原発の建設は認めない—という方針を打ち出したら、早速、大間が立地する青森県からクレームが来ました。当時経産相の枝野幸雄が青森県に行くと、再処理を禁止するなら、六ヶ所村で預かっている使用済み燃料や廃棄物を全国の原発に戻す、と脅されました。大変な事態なので、野田内閣は再処理を認め、大間原発建設も認めたのです。枝野から聞いたのですが、アメリカから「原発を止めるなどと言うな」と釘を刺されたというのです。

Q：北朝鮮問題をめぐるロシアの立ち位置はどうなのか？

A：ロシアは景気が悪いから、北朝鮮の核やミサイルに関わっている余裕はありません。何と言っても鍵を握っているのは、13億も人口を抱える中国です。

中国がこうしようと言え、ロシアは中国に従います。インドはどうかというと、反中国ですから、安倍さんが行けば大歓迎ですし、反中国だから核を持ちました。中国に対する国民感情は悪化していますが、中国とは戦争する相手ではありません。

歴史は日本が中国と戦争をして散々な目に遭ったことを証明しています。だからこそ、安倍さんは中国に行くべきなのです。

Q：日本が生き残るためには、永世中立国宣言が近道ではないでしょうか？

A：永世中立国のスイスをなぜ、ナチスドイツが攻めなかったのかというと、スイスは徴兵制の国であり、自前の武器で戦う強力な軍隊があるからです。きれいごとでは済まない問題です。

Q：なぜジャーナリストになったのか？

A：終戦時、私は小学5年生で、それまでは、今度の戦争は、欧米の植民地支配に苦しむアジアの人々を解放する聖戦と教えられました。しかし終戦の翌日からは、あの戦争は間違った戦争だったと、先生もメディアもそれまでの主張を一変させました。やがて、戦争は言論の自由がなかったから防げなかった、と考え、体を張ってでも言論の自由を守りたい、ジャーナリストになろうと心に決めました。

1965年、ソ連で世界言論大会が開かれ、この大会に出席しました。共産党だけが、先の戦争に対して反対していたことや連合軍を解放軍と呼んでいたこともあって、共産党には畏敬の念もありましたから、ソ連に対する憧れもあったのです。しかしソ連の現実を見たら、言論の自由はなく、これではこの国は駄目になる、社会主義は駄目だ、と直感しました。

そのような経緯から、私はアナーキーになった時もありました。

Q：印象に残っている政治家は誰か？

A：スケールの大きさでは何と言っても田中角栄、正直さでは小淵恵三でしょう。沖縄の普天間基地の辺野古移転問題は、いまだにもめついています。振り返ると橋本、小淵、野中広務、梶山静六らは沖縄を広く歩いて、住民を説得しました。小淵内閣の時、沖縄県は辺野古移転をOKし、そのお礼として2000年7月、沖縄サミットが開かれたのです。

Q：安倍さんの人気低下はどうか？

A：安倍政権ですが、一強多弱体制が長く続いているので、神経にたるみが出て、不祥事が相次いでいます。森友の籠池理事長をインタビューした際、籠池理事長は安倍総理夫人に

①有地借地の仮払い金を返してほしい

②国有地を安く売却してほしい—と電話で要請したら、留守番電話だった。でも用件を吹き込んだところ、総理夫人の秘書から、今年度はできないが、来年度ならOKという連絡をもらった、と私に説明しました。

さらに加計学園ですが、獣医学部の新設申請は15年間却下され続けましたが、第2次安倍内閣ではすんなり通りました。加計理事長と安倍さんは大学時代からの友であり、ゴルフ仲間でもあります。そういう間柄にあって、学部新設を申請していることを知らなかったという答えは、筋が通りません。首相はウソをついている、と考えているのです。

こうした状況にもかかわらず、自民党内からは、安倍さんに対する批判が出ていないことが不思議であり、残念です。次の総裁選には石破茂も立候補しますが、安倍さんの当選は揺るがないでしょう。北朝鮮が挑発しているから、安倍さんでなくては、という暗黙の了承があるのです。その意味で、安倍さんにとって北は、ラッキーな存在ですし、民進党はごたごたしています。当分、安倍一強体制は続くのではないかと。



北問題について持論を述べる田原さん

塾生の一言感想 情報選択の大切さが分かった

○…今回初めて参加しました。田原さんの話は当然ですが、輪読をすることもでき、とても勉強になりました。輪読の際、塾長が書かれたことや、塾生の感想に対する考えや見解を話してくれたので、内容がよく理解できました。(石谷隆太)

○…フェイクニュースを信じるな—すべてを信じないで、まず疑ってかかる。おかしいと思うことは、その直感通り、おかしい。SNSで個人が情報を発信できるようになり、本当に多くのニュースがあります。その溢れんばかりのニュースを取捨選択して、自分で分析したり真偽のほどをチェックして、持論を持たなければいけないと感じました。田原さんの「時代を読む」ですが、日本の政治や動向に関して、時の首相にアドバイスをしていることに驚きました。世界の動きについても、分かりやすく解説してもらったおかげで、霧が晴れた気がします。自分で本質を見抜き、考えていく力を身につけたいと思います。(植松里菜)

○…輪読での侃々諤々の意見交換は、とても大事なことだと認識しました。稲盛さんが社長時代に心掛けていた「しがらみや利害関係を離れた視点で、冷静に問題を解きほぐしていくこと」は、とにかく結論、結果だけを追い求める私たちに、生きるヒントになっていると考えます。フェイクニュースのDVDや塾長の話によって、ロシアやアメリカといった大国が、高度な技術・頭脳を使って、組織的にいろいろな情報を流していることを知りました。情報の渦に巻き込まれずに、必要以上の情報を収集しない。できるだけリアルな情報の発信に努めたいと思います。(大野一彦)

○…会社やプライベートのいろんな場面で迷うことが多いのですが、そんな時は最終的に「人間として正しいのかどうか」という原点に戻って判断する重要性を、あらためて感じています。この原点は、つい忘れてしまいがちです。また人間関係などでも迷うことは多いのですが、相手の立場に立って、優しく、自分がされて嫌なことはしない、の精神で頑張ります。田原さんの話ですが、政治的なことは難しく感じましたが、「戦争は絶対に駄目」だと思います。(加藤美智子)

○…今までの勉強会の中で、一番メモした量が多い勉強会でした。輪読、フェイクニュースについての講話、田原さんの講話と、刺激がいっぱいでした。今、自分が生きていく時代の本当の姿というか、見えていなかった面、そうだったのかという納得と、もっと知りたいという気持ちでいっぱいです。今、この時代に生きていくからには、この世の中

のことを理解して、考えて生きなければと、再認識させられました。それができている下村塾長と田原さんを、ますます尊敬し、好きになりました。(亀井愛美)

○…フェイク・ニュースの現状と影響力について、大きな問題と感じました。国が情報規制することは、国による情報統制、言論の自由を奪うことにもなりますから、個々人が的確な情報判断をすることが大事だと思います。田原さんのナマの話を聞いて、日本の立ち位置や政治の動きなどについても、勉強になりました。(菅野寿男)



盛り沢山の勉強会を締めくくる夜遊び学

○…輪読会、塾長講話、田原さんの応援団講義を聞いて、自分の判断軸を鍛え続けなければいけないと感じました。田原さんや塾長のように、自分の目と耳で情報に直接当たれる人と、私たち一般人が見聞きする情報は、同じ事実でも、違う形の情報として伝わってくる。その判断を「人として正しいかどうか」という基準でできるかどうか、常日ごろから考えたいと思います。(木原大輔)

○…あの輪読のテーマは、とても難しく感じました。人としての正しさ、つまり善悪の基準は、その人の価値観で違うケースが多いからです。でも塾長が言う通り、愛や喜び、悲しみ、怒り—そういった感情は、文化や人種が違っていても、共通しているのではないかと思います。心の準備がないまま、国境がなくなってしまうたら、大混乱になると想像しますが、人の心が利他の心になれば、自然にボーダーレスの時代になると思いました。(熊谷美紀)

○…輪読会での、塾長と中島さんの「海外から見た日本」の話は、大いにためになりました。自分が思っていることは常識ではなく、グローバル社会の中では、多様な価値観を

受け入れようとする心がないと、考えが行き詰まってしまうと感じました。フェイク・ニュースに関連して、塾長は、その人物の本質を見極めるために、「どうして？」を繰り返して質問すると言いました。相手と話す時は、自らが深くならないと真剣にならない、と言うのが私の課題です。自分が考えた言葉で、もっと伝える努力をしたい。これからは、学校教育の中で、真実を見極める能力を付けさせなければと思います。
(黒石涼)

○…フェイク・ニュースに対しては、自分が最初のフィルターになって、情報源を確認する。どうして？ どうして？ の精神で情報を掘り下げる。情報過多にならないように、心掛ける。情報がメディアでどのように作られるかを学ぶ。このメディア教育ですが、自分だけではできない、新聞や本など多方面から意見を求めます。当面これらがやるべき課題です。
(桑島祐子)

○…「生き方」の輪読では、複雑な問題ほど、解決すると実はシンプルであり、判断基準は、「人間として正しいかどうか」にある、と学びました。外国人と関わる中で、無意識に偏見や思い込みがあったように思います。塾長の「一つの生命から人類は始まった。自分中心に判断していないかの言葉に、ハッとしました。
(佐藤恵)

○…稲盛さんが言う「トラブルの原因は、極めてシンプルなこと」に思い当たることが多い私です。多くのことを伝えたいばかりに、息子によく、「何が言いたいのか分からない」と注意されます。シンプルな伝え方をできるように、人の話をよく聞く、自分の判断力を付ける。そのためにも、坐禅を続け、心の成長を図ります。
(篠原陽子)

○…田原さんは、「戦争が起きたのは、言論の自由が奪われたからだ」と指摘しましたが、こうした見方は初めての体験です。輪読会では多様性の話が出ましたが、教えられことを鵜呑みにするだけでなく、自分から情報を取りに行くことが重要だと、フェイク・ニュースの話しから学ぶことができました。田原さんからは、凄まじい熱量を感じました。
(武松翔平)

○…前回7月の勉強会に行き体験入塾して、入塾を決めました。今回が初めての正式参加となります。輪読会、塾長講話、応援団講義から、様々なことを学びました。手にしたものを一度整理したいと思います。まず、情報に対しては、受け身になっていることを反省すると同時に、自分が考えないことによって、自分自身がフェイク・ニュース

の発信源になりかねないことを考えさせられました。塾長が言う通り、「自分で考え、自分で決める」を実行していきたいと思います。具体的には「なぜ？」を3回、問います。田原さんのまっすぐな話に聞き入りました。歴史がどう動いたのか、世界はどう考えているかが、本当に分かりやすく教えてもらいました。
(橋本光雄)

○…輪読会。物事をシンプルに考えることをテーマにしましたが、忙しいとつい、複雑に考えてしまいます。その際有効なのは、少し立ち止まって呼吸を整えることだと、最近、気づきました。国際問題では単純に、人としての判断、基軸から決めることが大切であることを学びました。人はどうしても自分の利益のために行動しますが、長い目で考えれば、人のためにやっていると、自分に返ってくる。小さい時学んだ「人のために何かをする」という当たり前のことが、今の時代、必要だと思います。
(林田宗士)

○…田原さんの話を聞いて一番感じたことは、自分の置かれている状況を知るには、正しい情報を持つこと。その正しい情報と、自分がどうありたいかという願望を繋いだ線上で、判断、決断することが大事だと学びました。
(望月美紗緒)

○今回の塾は「国際関係」の色が強く、多くの学びがありました。反日感情を持つと言われる中国人や韓国人も、実際に付き合ってみると、普通の良い人たちです。塾長が言う通り、ポリティクス以外は、何ら問題はありません。日本人政治家は国際会議で本省の原稿を読むだけとは悲しいこと。自分の意見を言えるような自分になれるよう努めます。
(渡辺薫人)



濱田副塾長の手締めで終了する夜遊び学